

留学生のための物語日本史

第 15 話 徳川吉宗（とくがわよしむね）

「将軍家継(いえつぐ)が亡くなった」

紀州藩主徳川吉宗のところに、そのような報せが届いたのは、5月に入ってからのものであった。

「まだ幼かったであろう。かわいそうに」

徳川吉宗は、もともとは紀伊徳川家二代藩主・徳川光貞(みつさだ)の四男であった。紀伊徳川家を継げる立場ではなく、越前国葛野(かずらの)藩主で三万石の領主でしかなかった。しかし、三代藩主で長兄の綱教(つなもり)が死去、跡を継いだ三兄の頼職(よりもと)も半年のうちに亡くなってしまった。宝永二年、吉宗は、そのような流れで紀伊徳川家の藩主になったのである。

「これでまた何か出せと言われるのかなあ」

紀伊徳川家は、宝永大地震の被害があり、また紀伊御三家として京都や大阪に目を配ったりと、様々な費用がかかり、幕府から十万両もの大金を借金していた。吉宗は、質素儉約を旨として、藩主である自分自身も木綿の服を着るなど、率先して藩政改革と財政の健全化に努めていたところだ。そのようなときに「将軍家の葬儀」として、また支出を求められてはたまらないのである。

「殿、そのような場合ではございません」

「なんだ、爺」

「お言葉ではございますが」

爺、と呼ばれたのは有馬氏倫(うじのり)という吉宗の側近で、御用役に就いていた士である。まだそんなに年齢は重ねていなかったが、有馬の容姿がいつも落ち着いており、また、顔も皺(しわ)が多かったので「爺」というあだ名をつけられていた。

「将軍家、家継公には齡(よわい)八歳にて夭折(ようせつ)¹されております。当然に世継ぎがなく、次の将軍家には非常に大きな問題があります」

「そうか」

吉宗には全く関係がないといった感じであった。

「殿、もしかすると殿が将軍になるかもしれませぬ」

「爺、何を言っておる。そもそも、将軍家には、館林に先代家宣(いえのぶ)公の弟君があらせられる。先例に従えば、四代家綱公の後、甲府・館林の藩主綱吉公が五代藩主になったのではないか。将軍家は宗家(そうけ)²の血筋から将軍を出される。そのために館林や甲府の藩があるのだ。紀伊に回ってくることなどあるまい」

吉宗は、庭に降りると、片脱ぎになって弓を構えた。鷹狩が趣味の吉宗は、思い立った時にいつでも弓を射られるように、庭に常にその道具が置いてあった。有馬氏倫は、庭に降りた吉宗の後を追って、縁側まで追いつがった。

「孫市はどう思う」

庭に控えていたのは加納久通(かのうひさみち)であった。加納久通は通称を角兵衛といい、小姓の時代から吉宗の側近であった。本人同士は側近というよりは「幼馴染」というような感覚のほうが強かったかもしれない。

「殿。殿のおっしゃる通り、先例に従えば、館林の松平清武(きよたけ)公が将軍職に就かれるのが通常と思われます。しかし、清武公は館林城の普請を行うために、税を上げ、そのことによって領内が荒れております。将軍職としていかなものかと思われるところもあるのではないかと」

「ふむ。そういえば館林藩では百姓一揆があると聞く。幕府は、江戸の近くで一揆が起きたり、あるいは江戸の館林藩屋敷に強訴があるなど、様々な問題があると聞く」

ピュンと、吉宗の放った矢が空を切って俵に当たった。

「それに、清武公はもともと越智喜清(おち よしきよ/のぶきよ)殿に育てられてその家督を継いでおり、松平姓を名乗っています。これは神君(しんくん)³家康公の次男様でありながら、秀忠公に二代将

軍を譲られた越前福井藩主の松平秀康(まつだいらひでやす)公の例にもあります」

有馬氏倫は、次の将軍が松平清武ではないというような例を挙げた。どちらかという、彼にとっては自分の知識を言いたいという欲求のほうが大きかったのかもしれない。

「爺、まあ、よくわかった。さすれば、将軍家宗家には世継ぎ候補がないということになる」

話しながら、吉宗は次の矢を番(つが)えた。

「はい、殿のおっしゃるとおりでございます」

加納孫市はすぐに相槌を打つ。

「コホン」

有馬は軽く咳払いをすると、吉宗の少し前に正座のままにじり寄って、声を上げた。

「神君家康公は、将軍家にもしものことがある場合、尾張藩・紀州藩・水戸藩の三藩で補佐して将軍家を盛り立てるようにお話しされております。そこで、この御三家の中から将軍家を選ばれることになるかと思えます」

ピュン、有馬の言葉の途中に、聞いているのか聞いていないのか、吉宗は弓を放った。

「で、私になるというのか。おいおい、爺。そういうことは御三家筆頭の尾張がやるよ」

「しかし」

加納孫市が口をはさんだ。

「尾張藩は、吉道(よしみち)公、そしてその跡を継がれた五郎太様、相次いで若くして亡くなっております。現在の継友(つぐとも)殿は、妾腹でおられまして…」

「よい。他家の血筋など関係ないわ。まあ、そんなに心配ならお前ら二人、明日から江戸に行くから自分の目で調べてみよ」

江戸表(えどおもて)⁴に着いた一行は、さすがに将軍の喪に入って活気がなくなっている江戸を見て衝撃を受けた。

「吉宗殿」

六代将軍家宣の正室天英院(てんえいいん)が吉宗と謁見した。

「江戸を見てどのように感じましたか」

「天英院殿には申し上げにくいですが、将軍家がお隠れになり、江戸は活気を失っております」

「江戸が活気を失ったのは、そのような理由ではないわ」

天英院は唾を吐き捨てるように言った。女中たちは周囲を気にしながら深くうなずいた。ほかに聞いている人がいないという合図である。

「江戸が活気を失ったのは、新井白石と間部詮房(まなべあきふさ)が政権をほしいままにしておるからであろう。そもそも学問で政治ができるはずがない。人々は生きておるのじゃ」

「なるほど、おっしゃる通りでございます。そもそも米をもってその相場によって武士は収入としております。米の出来によって物事を決めねばなりません」

「あの新井や間部は、月光院と一緒になりおって、わらわを馬鹿にしておる」

「ほう」

大奥にはあまり興味がない吉宗は、何とか助けてほしいという目で有馬の方を見た。しかし、有馬はわざと障子のほうに目を向けていたのだ。

「だいたい、絵島(えじま)という娘を大奥に入れ、こともあろうか河原者の歌舞伎役者風情と恋仲に落とし、その下賤の子を将軍家に入れようとした。本来であれば、そのような不始末の責任を負って、新井も間部も腹を切らねばならぬところ。家宣公も早くに病に倒れられ、そのあとを受けられた家継公は八歳でお亡くなりになられてしまった。このままでは、徳川家ではなく新井や間部のような者に幕府をほしいままにされてしまう。いつの間にか将軍家に下賤の血が入り、おかしいことになってしまう。ああ、こんなことになるならば京都からこのようなところに来るのではなかった」

半分ヒステリックに、天英院は叫んだ。天英院は、京都の近衛家から興入れた家宣の正室ではあったが、二人の子供を若くしてなくしてしまい、それ以来少々ふさぎ込んでいることが多かった。そんなこともあり、家宣が側室に迎えたのが月光院である。家継は月光院の子供であったが、子供のうちに亡くなったために、大奥の実権は天英院が持ったままであった。

まさに、天英院と月光院は、家宣の寵愛をめぐり激しい対立をしていたのである。新井白石や間部詮房は、七代将軍の生母である月光院に近く、天英院は月光院への恨みも込めて新井白石や間部詮房を嫌っていたのである。

「ところで、吉宗殿。あなたは新井や間部の政治をどのように思いますか」

「私は紀州の片田舎にいますので、天英院様のように江戸市中をつぶさに見ているわけではありません。しかし、将軍様のお膝元である江戸市中が、火が消えたように暗くなってしまっはあまり良いこととは思いません」

「では、吉宗殿ならば、新井や間部を」

「それはよくわかりませんが、学問で政治ができるわけではないという天英院様のお言葉には、深く同意いたします。紀州も、質素儉約を旨としていますが、しかし、活気があるように様々なことを行っております」

「そなたに将軍になっていただきたいものよ。尾張の継友殿は、新井や間部と仲が良く、あの者になっては江戸がさらに暗くなってしま」

「なるほど。そのようになりましたらお約束を果たしましょう」

吉宗は這う這うの体(ほうほうのてい)⁵で何とか天英院の部屋を抜け出した。

「いやいや、将軍家とはいえ後家(ごけ)⁶さんはこわいのう」

「殿、そんなことを言っていてはいけません。天英院様は殿を将軍に推すつもりでございましょう」

有馬は慎重に言った。

「爺、将軍なんかいやだけどなあ。あんなのがたくさんいるんだろ。やめてもらいたいなあ」

「本来は、そのような側近や一人の老中がすべてを行うようなものではないはずですが。しかし、数名の人がやっていたら、どうしても偏った政治になってしまう。天英院様は、ご自身の好き嫌いもあると思いますが、側用人の間部詮房殿などが取り仕切っている政治のやり方に大きく反対しておられるということであれば、それは江戸市中の多くの人々の願いかもしれません」

加納孫市は、やはり有馬と一緒に聞いていただけあって、そのようなことを言った。

果たして七月、将軍の宣下を受けたのは、紀伊の吉宗であった。

大奥の女性が将軍を指名したことはそれまで例がなく、また女性が政治に口出しをすることすら考えられなかった。そのため、最初は誰も難色を示したが、天英院は御台所(みだいどころ)⁷としての立場を最大限に生かし、「これは先代将軍家宣公の御本心なのです」と次期将軍に吉宗を強く希望したとされる。

吉宗は、将軍になって新井白石や間部詮房をやめさせ、神君家康が残した幕府の組織を使った政治に戻した。紀州からは有馬や加納といった小姓時代からの側近を40名ほど連れて行っただけで、それもあまり政治に口出しをさせなかったのである。

定免法(じょうめんほう)⁸や上米の制(あげまいのせい)⁹による幕府財政収入の安定化、新田開発の推進、足高の制(たしだかのせい)¹⁰などの官僚制度改革は、いずれも幕政の改革と財政再建を大きく進める結果になった。また、市民から直接意見を聞く「目安箱」を設置するなど、江戸市民と幕政を近いものにしたのである。訴訟のスピードアップのため公事方御定書(くじかたおさだめがき)¹¹を制定して司法制度改革、江戸町火消しを設置しての火事対策、また公平性では定評のあった大岡忠相(おおかただすけ)を江戸町奉行にした。医学の発展のために小石川養生所を作り、また、文治政治で衰えていた武芸を奨励したのである。

これら、吉宗の行った改革を、その年号をとって「享保の改革」といい、この改革によって江戸幕府は再び立ち直ったのである。

1 夭折…年が若くして死ぬこと。

2 宗家…一門・一族の中心になる家系。本家。

3 神君…偉大な君主を称えて呼ぶ名。江戸時代には徳川家康を意味した。

4 江戸表…地方から政治の中心地である江戸をさしていった語。

5 這う這うの体…さんざんな目にあったり、大恥をかいたりしてやっとのことで逃げ出すさま。慌てふためいて逃げ出す様子。

6 後家…夫に死なれ、再婚をせずに独身でいる女性のこと。

7 御台所…将軍の夫人の敬称。

8 定免法…江戸時代の年貢徴収法のひとつ。

-
- ⁹ 上米の制…大名から、1万石につき100石の割合で米を徴収するという制度。
- ¹⁰ 足高の制…吉宗が定めた幕府の給与制度。幕府の役職ごとに一定の役高を決め、就任する者の家禄が役高より低いとき、不足分を在職中だけ支給するというもの。
- ¹¹ 公事方御定書…江戸幕府の裁判の基準についての先例をまとめて文書化したもの。